

# 病氣治療と琵琶

—「釋文」から—

森田 幸子

## 〔抄録〕

わが国の医療は、科学的医療と呪術的医療の二層構造である。

近世においても第一層の中国医学にもとづく科学的医療と第二層の呪術的医療によって病氣治療が行われていただろう。

ここでは、第二層の呪術的医療の担い手である盲僧の病氣治療

の固有性を明らかにするために「釋文」を読み解いてみたい。

キーワード…病氣治療、琵琶、「釋文」、盲僧、医療の二層構造

## はじめに

福岡県柳川市に感応院という天台宗寺院がある。先代住職の頃は、正月、五月、九月には朝から晩まで祈禱をしていたという。また病人の肌着にも祈禱をしていた<sup>(1)</sup>という。

この寺院は、嘉元三年（一三〇五年）高良玉垂宮の分靈遷座の時が開基とされている。元禄十一年（一六九八年）柳川藩三代藩主立花鑑虎の意向により東叡山の末寺になり、宝永二年（一七〇五年）以来盲僧の支配寺となった。そのため多くの盲僧関係文書が今も残されている<sup>(2)</sup>。

盲僧とは、竈祓いを行う琵琶法師である。彼等が竈祓いの時に使用するのが「釋文」<sup>(3)</sup>である。

この論文ではこの「釋文」を、呪術的医療の病氣治療の面から捉えて、一、病氣の原因と予防について。二、琵琶と治療について。を述べてみたい。

わが国の医療は、科学的医療と呪術的医療の二層構造である。近世においても人々は、第一層の中国医学にもとづく医療だけで病氣が治るとは考えていなかっただろうし、呪術的医療の第二層にたよること多かった。この層の医療は、病氣の原因となる疫神・邪神調伏のため、僧侶や山伏修験による加持祈禱を併せて行い、病因を陰陽師が

占い、鬼神、土公神を祀る宗教儀礼も行われていた。これらの二層によって、病氣治療が行われていた。

この第二層形成には、僧侶・山伏修験・陰陽師と盲僧が担い手としてある。ここでは盲僧の固有性を明らかにするために「釋文」を読み解いてみたい。

## 一、病氣の原因と予防

### 1、釈文の構成

釈文は地神經の語句を解釈することである。玄清法流の釈文は、「本經（地神經）」「地神經琵琶之借」<sup>(釋)</sup>「神名經」「地割」「星之段」「勝負ノ段」「釋迦の段」「王子の借」<sup>(釋)</sup>「四方立 勝負の段」「嶋廣經」「廻向之段」の十一の釈文からなる。釈文のもととなる総称『天台宗玄清法流地神經』には、①「佛説地神大陀羅尼經」②「天地開闢地神大陀羅尼經」③「琵琶の釋」④「佛説地神大陀羅尼王子經上卷」「同 下卷」⑤「涅槃」の五つの経文がある。

釈文とのつながりは大体、四季土用の荒神の由来を説く①「佛説地神大陀羅尼經」の釈が「本經（地神經）」であり、琵琶の功德を説く③「琵琶の釋」の釈が「地神經琵琶之借」、荒神の本地である「五郎王子」の由来を説く④「佛説地神大陀羅尼王子經」②「天地開闢地神大陀羅尼經」の釈は「王子の借」「四方立 勝負の段」「勝負ノ段」であろう。荒神の守護屋敷を説く「地割」、釈迦一代記を説く「釋迦の段」、一部荒神を説く「嶋廣經」、陰陽道的な「星之段」と区別される。

る。

ここでは特に「本經（地神經）」「地神經琵琶之借」「王子の借」「四方立 勝負の段」「勝負ノ段」に注目し読み解きたい。

### 2、病氣治療の一例

福岡県全域を対象とした「緊急民俗文化財分布調査」から、荒神盲僧の廻壇について佐々木哲哉氏は述べているが、それによると、四季土用の荒神祓い（竈祓い）を中心に正月廻り（新しい三宝荒神の御札を配布）・五月の夏廻り（麦の収穫後に疫病退散のために大般若経誦）が行われていた。

実際の荒神まつりは、

#### ○発願の座

- 1、発願文（それぞれの家の荒神をまつる趣意について述べる）
- 2、灑水<sup>しすい</sup> 護身法引
- 3、五法の祓（誦経しながら東西南北と中央を祓う。錫杖を用い、終って契印）

- 4、九條錫杖經誦経（終って九字を切る）

- 5、佛説不動經誦経（聖不動經―不動三十六童子・不動秘密陀羅尼）・約四十分

- 6、祈願文

#### ○中の座

- 7、金光明最勝王經堅牢地神品第十八誦経
- 8、佛説地神陀羅尼經（地神經）を琵琶の弹奏によって誦経

9、祈願文

○結願の座

10、法華經誦經（方便品・寿命品・普門品）——大乘妙典

11、佛説大荒神施與福德圓滿陀羅尼經（荒神經）を琵琶の彈奏によつて誦經

12、般若心經誦經

13、圓頓章（摩伽止觀のうち）

14、結願文

15、護摩法印

以上が荒神まつりの行法<sup>(4)</sup>である。

荒神祭りの發願の座では、淨化に關係した修法が行われ、続く中の座では堅牢地神の徳を讃え病氣治療の祈願をこめ、最後に結願の座では堅牢地神・荒神を送り返している。以上が病氣治療の一例である。

荒神が地神と習合して、火の神や竈の神とともにイエの守護神として意識されるようになったのは、荒神盲僧の関与によると考えられる。

中の座八段で誦經される經文「佛説地神大陀羅尼經」<sup>(5)</sup>には仏を茶毘にふそうとしたが五龍王・地神等が信伏しないので、「仏が大地の散壊しない因縁を地神王等がこのような自在、威徳、神通の力で常に堅固しているからであると説く。そしてもし大地を犯作しようと思う者は、五色の幣帛を捧げ、五色の幡を懸け置き、百味の飲食、一切の珍財を運び、並びにこの經を誦誦しと祭り方を説く。病氣については、この經を地神大陀羅尼、五龍王と名付け、不斷に萬病有つて、常に悩乱するときにはこの經を二十五遍誦誦し、三宝を礼拝しこの行をした

者は、縦横に大地を犯作しても、地神は忿心せず、常に安穩として、末世の子孫は福壽増長であつて短命怖畏がない。」と經文の病氣治療の効果を説いている。

經文を解釈した釈文「本經（地神經）」には、

「五退五林野ノ、爲ニ取テ、ネ半ギヨノ、一官深陀羅尼ノ、ト、ドウソウモノ、地神陀羅尼ト、ノンビ時、ヲカレバ、イカテカ、佛ニ、大地ヲ、フゾクシ奉ル、其時、廣サモ、八尺、深サモ、八尺、合テ、壹丈六尺ノ、大地ヲ佛ニフゾクシ奉マツル、其日ノコウワ、三千大千セカイニ、アンノシリイク、圓滿シリキ」<sup>(6)</sup>

經文は、因縁や祭る方法を説き地神のために陀羅尼を誦誦すること  
で病氣がなくなると説く。釈文は、經文の後半部分を重視し誦誦が病  
氣をなくすとわかり易く説いている。

茶毘のための火が出なかつたことは、犯土したために地神（大地の神）が怒り、仏にさえ信伏しない堅牢地神や五龍王、正了知蛇、毒氣神王などの土地の闇の神々の本縁譚を造くり、その功徳と神威を語つていふと考えられる。またこの經は、仏を茶毘にふそうとした時、大地の神（荒神）が現れて、大地を犯す前にあらかじめ三宝荒神を祀るよう要請したと考えられる。この荒神は仏の入滅以前からその土地に住む荒々しいおそろしい神とされ、荒々しい性格の地主神としてとらえられていた。

荒神は、自然神で早魃や天候不順、虫害をもたらし、さらには流行病やもろもろの穢れをもたらす。それは不意に現われる地靈の類で、その現れ方は、五龍王・五帝龍王・水神・地神・土公・土府・地府、

さらに、大地母神たる堅牢地神・弁才天、即時的名を持つ正了知蛇・毒氣神王、三宝荒神・竈神、麻多羅神などの後戸の神・若宮などいろいろと表現される。

この地霊を鎮める方法は、地中にうめもどしたり、地中に供物したり、反間などで踏みおどろかすなどして踏み鎮めることが多かった。

中世民間神楽の世界の病氣治療は、「崇りをする地霊であるがゆえに、はたものとして攘却するのではなくて、呪言や印呪で駆使することによって舞い踊らせ、それによって鎮め、秩序の回復を期待<sup>(7)</sup>」し、呪者は、「靈威の高い不動明王や五大明王などの仏心を勧請して、その仏心自体のはたらきによってか、呪者みずからがその仏心に入我して、その靈威を身につけて、呪文・真言・祭文などの呪言を踊したり、印呪しながら、地霊の類を舞い踊らせる。」<sup>(8)</sup>といった方法がとられた。神楽に対して盲僧の病氣治療を次に分析してみたい。

### 3、盲僧の病氣治療

前述の荒神祭りから盲僧の病氣治療は、荒神を元の場所へ返すことであった。「廻向之段」には、その荒神を送り返す方法が、説かれている。

「キヨウノ大檀那ノ内ニ萬ノ福ヲ授ケ玉イテ、ヒイジチユウユウヒキグソク玉ノ御寶殿ニ至マデ、カエリ影向シタマイテ、大神ナ國々諸神ノ社々、佛ハ寺々堂塔ニカヘリ影向シ玉テ、神ツバヲバソラニアゲ、ニワツバヲバ内ニトッマラセ玉イテ、我神トウクワヤリ奉ツルマジ、先ミソノナル成木ノ下ニイワイシヅメテ、」<sup>(9)</sup>

回向した荒神を、御蘭の木の下に祝い鎮めて、送り返す方法がとられたと考えられる。

釈文の荒神の送却方法を考えるにあたって、まず平安時代末期の故事・因縁を集めた説話集の中に、四季を陰陽五行に配して土用の由来を説明した『注好選』の〈文選浄止 第八十六〉から見てみたい。五郎の王子は土用の擬人化であるだろう。ここに釈文の五郎の王子の共通点と相違点を見ると送却方法の違いが見えてくる。

#### 〈文選浄止 第八十六〉<sup>(10)</sup>

(1)「昔舎衛國王有都夫王名づ。其夫人四たりノ王子を生メリ又一子ヲ任<sup>セリ</sup>即ち未だ任子を生<sup>マレタ</sup>ハ<sup>バ</sup>王没崩<sup>タシテ</sup>王に遺言在リ君等吾が死後ニ天下ヲ領<sup>ジテ</sup>人民を救ひ太郎春三月東ヲ領<sup>ズ</sup>可し。次郎ハ夏三月南を領<sup>ズ</sup>可し三郎は秋三月西を領<sup>ズ</sup>可し四郎は冬三月北を領<sup>ズ</sup>可しと。任子ハ未だ生れざ<sup>レバ</sup>所領置<sup>カ</sup>不<sup>ズ</sup>王崩<sup>ジ</sup>了ん<sup>ヌ</sup>即ち四たりノ王子父ノ命の如く四方を領<sup>ズ</sup>時に任子生<sup>セリ</sup>已<sup>デ</sup>男也。成人<sup>シテ</sup>兄等ニ向ひて云はく吾が為<sup>メ</sup>父何かなる領<sup>カ</sup>有<sup>リ</sup>シと兄等答へて云はく君未だ生<sup>ジ</sup>給<sup>ハズ</sup>所領を置<sup>カ</sup>不<sup>ザリキ</sup>と。五郎王子ノ云はく同じ父の一つ腹也。豈に所分无からん哉。君達<sup>ガ</sup>拘<sup>カ</sup>、へ惜<sup>ワシム</sup>所也と度く相論<sup>ヲ</sup>致す」

(2)「即ち五郎王子力用勇健にシテ、一人当千也。即ち鬪諍盛りニシテ天下静<sup>マ</sup>不更に損傷<sup>ヲ</sup>致<sup>シテ</sup>敢へて可停<sup>ルニ</sup>由無し時大臣有<sup>リ</sup>文選博士<sup>ト</sup>云ふ。五つたりノ王子ノ前ニ来リテ再拜<sup>シテ</sup>曰はく暫く公達各く坐し給<sup>ハズ</sup>文選謹しみ啓<sup>ス</sup>可<sup>シ</sup>と時に五つたりの王子許<sup>ニ</sup>諾<sup>シテ</sup>各おの座<sup>ニ</sup>ヒス、博士ノ云はく王已でに万民一安<sup>ニ</sup>ん<sup>ゾ</sup>国土持たむ為<sup>メ</sup>君等ニ

各おの四方ヲ領ぜ令む然るに遺言ヲ違ひテ国土ヲ破り人民ヲ損ず甚だ以つて不可也。者公達御心平らかにシテ国民持たバ吾即ち各おの三分ち配テ奉ラム。五たり王子乍ら平等ニ七十二日受領し給へ。」

(3) 「四たりの王子各おの方々十八日分ち五郎の王子ニ奉リタマヘと時ニ君等博士の言バ随ひテ七十二日承け引きテ心平らかニ怨み止みヌ」

(4) 「五郎王子博士ヲ語らひテ言はく吾等将来ニ人有りて博士ノ末孫ト者ハ縦眼穿頭打つトモ其ノ過免ス可シ敬ヘテ崇タリ无カラシメン者耶と。」

(1) 「五郎の王子」の起源を舍衛国の「都夫王のまだ生まれていない子」という人物に結びつける。注目すべきは(2)以降の「五郎の王子」が自分の領地を主張し、闘争が起き国土も人民も損ない、文選の博士が仲裁に入り、(3)五人平等に七十二日づつ領じ、怨みが無くなった。(4)そこで五郎の王子は博士に、「これから後博士の子孫という人ならば残虐な行為の過ちがあつても許して崇らない」と言つた。で終る。ここには五人の王子をそれぞれの本地に送り返すという送却儀礼の基本構造が見える。ここで重要なのは、文選の博士の仲裁によって、怨み崇りもなくそれぞれの本地に返す、という文選の役割である。

釈文ではどのように展開されていくのだろうか。三釈文「王子の釈」「四方立 勝負の段」「勝負ノ段」は五人の王子の由来を説く。

(1)から(3)の前半部は「王子の釈」<sup>(1)</sup>から五人王子の由来を、(3)の後半部は「四方立 勝負の段」<sup>(2)</sup>から門前の博士の仲裁を(五郎の王子の本地は「勝負ノ段」<sup>(3)</sup>)、(4)は「勝負ノ段」<sup>(4)</sup>から五郎の王子の崇りがなくな

つた状況を見て、釈文の送却方法の独自性を見てみたい。

(1) 「番後大王ハ、貳萬七千歳ヲ、タモチ、四人ノ、王子ニ、四方ニ、勝負ヲ、トカセ、給ソウライ、ケンガ、春三月ハ、太郎ノ、王子、夏三月ハ、次郎ノ王子、秋三月ハ、佐無郎ノ王子、冬三月ハ、四郎ノ王子ニトテ、四方ニ、勝負ヲ、トカセ、給ソウライ、ケンガ、日本ノ堅ニハ、大トウ、小トウ、セバツ、王トユウ、鶴義ハ、ミヘダ、王ハ四人、タレニカ、勝負ヲ、スルベキトテ、石ノ禮ブミ、御覧ジ、ケレバ、ナンデ、原ニ、泊リテ、三月ニナルワ、王子ニテヤ、アランズル、名ヲバ、五郎ノ、王子ト、ナツクベシ、去レバ、是コソ、鶴義ノ、主ニ、ナランズル、ヲノコナリ、」

(2) 「片道八年、イキモドリ、拾六年ノ、道ニテ、ソウロウ、(中略) 八日ト申、午ノ刻ニハ、四本ノ、小金ノ、木ノ本ニ、付給フ、四人ノ王子、彼芳、御覧ジテ、ヤアノ、我ハ、イカナル、王子ニテ、マシマス、ソウロウ、音子ノ、五郎ノ、王子ニ、勝負ナキ、故ニヨリテ、父ノ勝負ヲ、尋テ、是迄、参リテ候、(中略) 只壹反氣ノ衛敷ニシテ、ウシナワントテ、太郎ノ、王子ハ、空神、木ノ神ト成テ、ウタントスル、次郎ノ王子ハ火神、火ノ神ト成テ、ヤカントスル、佐無郎ノ、王子ハ、荒神、鶴義ノ神成テ氣覽トスル、四郎ノ、王子ハ、瑞權ノ、水ヲモ、イダイテ、ナガサントゾ、仲カ中王ヨリ、四方ゾ、布施ガレケル、五郎ノ、王子モ、ジンゾヲ、ウケタル、切ル君ミナレバ、木ノ神ノ、ウタントスル、時ワ、金神、鶴義ノ神ト成テ、切ラントスル、火神、火

ノ神ノ、ヤカントスル、時ハ、水ノフヲ、ムスンテ、雨ノ都ヲ、カタムケ、ケレバ、モユルヒモ、サンジテ、ユク、金神、鶴義ノ、神ト成テ、氣覽トスル、時ニハ、高サ八幡餘順、廣サ八幡餘順ノ、黒金ノ、岩ト成テ、鶴義ヲ、クダキ、タチモンノ、ツエト成テ、御座ニ、ハツレテ行、随分ノ、水ヲモ、イダイテ、流サントゾ、スル時ハ、火ノフヲ、ムスピテ、ナゲケレバ、流ル、水モ、河原ト、散ジテ行、

(3)「五人ノ、王子タチノ、勝負論ノ、身ヨリ、出ル、知志ニテ、青シ、赤シ、白シ、黒シ、喜名色ノ、五敷ノ、知志オニテ、七日、七夜ガ、間ハ、筑林、權ガ川ニ、流下ル、此川ノ、流ル、下モニハ、國有リ、國ノ名ヲバ、大門國トモウス、彼ノ國ニ、ヲウマシマス、王ノ皆ヲバ、嘉津ラミ、大王、祈ノ主シニハ、中天筑ノ、北御門、門前ノ、ハカゼト、モウス門前ノ、君、アシタノ、ラヤノリヲモ、仕ラントテ、(中略) 今年拾萬、七千歳ヲ、ヘタル、門前ノ君、七歳ニ成、五郎ノ、王子ニモ、セメマケ、給イテ、經箱ヨリモ、地神ノ經ノ、牧物ヲ、一卷取出シ、天讀ノ、コエヲ以テ、アソバサレ、ソウライ、」其時、門前ノ、君ハ、フノウ、牧ヲ、ヒロゲテ、五人ノ、大事ノ、中ニ立、入セ、給イテ、四方ニ、勝負ヲ、トカレタ、天ノ高サト、地ノ深サヲ、割合是ヨリワ、<sup>ひがし</sup>東方、春三月、九拾日ト、ナツケヘテ、十八日ヲ、ヌギダイテ、五郎ノ、大事ニ、奉ル、<sup>（後）</sup>ノウコル、七拾二、日は、太郎ノ、大事ニ、(中略) 東方ノ、木ノ神ト、ナアウイテ、神ニハ、庄臺、<sup>（地）</sup>李神、流王、本治ハ、藥師ト、岩ワレ、給、次郎ノ御王子、是ヨ

リワ、南夏、三月、九拾日ト、ツケテ、十八日ヲ、ヌギダイテ、五郎ノ、王子ニ、奉ツル、<sup>（後）</sup>ノウコウル、七拾二、日は、次郎ノ、王子ニ、(中略) 南方ノ、火神ト、ナアライテ、神ニハ、庄臺、火神、流王、本治ハ、<sup>（地）</sup>觀音ト、岩ワレ、給エ、三郎ノ御王子、是ヨリワ、西秋三月、九拾日ト、ナツケテ、十八日ヲ、ヌギダイテ、五郎ノ、王子ニ、奉ル、ノコル、七拾二日ハ、佐無郎ノ、王子ニ、(中略) 西方ノ、<sup>（地）</sup>金神ト、ナライテ、神ニハ、ビヤク、タ子ニ、<sup>（地）</sup>金神、流王、本治ハ、阿彌陀ト、岩レ、給エ、白王ノ、御王子ニ、是ヨリワ、北冬、三月、九拾日ト、ナツケテ、十八日ヲ、ヌギダイテ、五郎ノ、王子ニ、奉ル、ノウコウル、七拾二日は、白王子ニ、(中略) 北方ノ、<sup>（地）</sup>水神ト、ナライテ、神ニハ、コクダイ、水神、流王、本治ハ、<sup>（地）</sup>ビシヤモント、岩ワレ、給エ「神ニワ、ヲウタイ、土供、土神、流王、本治大日如來ト、岩ワレテ、マシマスモ、五郎ノ、王子ノ、本治也、」

(4)「今ノ、門前ノ、君ハ、歳徳ノ、御神、四人ノ王子ハ、三月、<sup>（地）</sup>夜神、五郎神、王子ハ、玉入ノ神、<sup>（地）</sup>差神、大荒神ト、集ラセ、<sup>（地）</sup>給、<sup>（地）</sup>祓鍵、<sup>（地）</sup>退散、ブクン、星ノ祭ニモ、スグレタル、御經ニテ、マシマセバ、去レバ、彼屋シメ、<sup>（地）</sup>參人ノ、内ニワ、<sup>（地）</sup>釋迦尾ノ、見弟子ガ、<sup>（地）</sup>參ノゾンテ、三尺五寸ノ、與京ノ、琵琶ヲ、横タヘ、左ノ手ニワ、タヘナル、キンコウノ、野里ノ、コヘヲ、引シラベ、右ノ手ハ、サンゾクノ、バツヲ、持、口ニワ、天徳、般若ヲ、讀奉ツルハ、<sup>（地）</sup>心命、三防、荒神、堅牢、地神モ花ト、ヘミヲ、フ<sup>（地）</sup>グンテ、ヨロコビ、マシマス、去レバ、<sup>（地）</sup>彼ユガキ、<sup>（地）</sup>參仁ノ、内ニ

ワ、天下<sup>てんげ</sup>之、フシヨウ、ナイゲノ、ヲコリ、悪<sup>あく</sup>壽<sup>じゆう</sup>、災<sup>さい</sup>難<sup>なん</sup>、ヒイジ、  
チユウ、七難<sup>しちなん</sup>之、天<sup>てん</sup>子<sup>し</sup>、チガヘラレ、モウソウ、

(1)「五郎の王子」の起源を「番後大王のまだ生まれていない子」という人物に結びつけ、父王は、日本の堅めに剣の形を残す。

(2)五郎の王子は、自分の領地を尋ねる為に片道八年の道のりを八日で兄王子に会いに行く。兄王子達は、領地を失わないために戦いとなる。

(3)五人の戦いの五色血潮がゴンガ川の川下に流れ、この川下の大門国の祈りの主が門前の博士であった。門前の博士は川上に上って、五郎の王子に攻め負けたが、地神経を読み、それを広げて五人の仲裁に入り、東春三月のうち十八日を五郎の王子が領じ、残る七十二日は太郎の王子が領じ、神は木神、本地は薬師と祝われ讃えられている。同じく夏・秋・冬三月のうち各々十八日を五郎の王子に分けて、次郎の王子は南七十二日を領じ、神は火神、本地は観音と祝われ讃えられている。三郎の王子は西七十二日を領じ、神は金神、本地は阿弥陀と祝われ讃えられている。四郎の王子は北七十二日を領じ、神は水神、本地は毘沙門と祝われ讃えられている。

五郎王子は中央四季の土用（立春立夏立秋立冬の前日約十八日間）十八日づつを合わせた七十二日を領じ、神は土供土神、本地は大日如来と祝われ讃えられている。

(4)秘験、泰山府君、星祭りにも優れている地神経ならば、琵琶を誦読する屋敷内には不動明王が降りてきて三宝荒神・堅牢地神が元の場合にもどって喜んでいる。彼の屋敷内では天下の不詳、内外怒り、

悪<sup>あく</sup>壽<sup>じゆう</sup>、災<sup>さい</sup>難<sup>なん</sup>、火事、誅、七難の天事を別なものにします。

五郎の王子は番後（盤古）大王から日本の堅めに形見の剣をもらう。重要な門前の博士の役割は、五郎の王子に攻め負けるけれど地神経を読み仲裁に入る。つまりは、地神経を読みそれによって仲裁の力を得る。さらに「勝負の段」では話は展開して、地神経誦読の効果によって、屋敷内では、荒神の祟りなく病氣も無い。で終る。

以上釈文の場合門前の博士は、地神経の誦読によって五人の仲裁を行い、琵琶による地神経誦読で、元の場所に送り返す方法がとられた。したがって病氣治療は、琵琶による地神経誦読によって、荒神を喜んで本地に返すことである。

#### 4、病氣の原因

わが国では、古代から病の原因を神や魂（コン・タマシイ）の祟りとする観念がある。牛頭天王が疾病の根源神であり、疾病をもたらす悪神（眷属）たちを統御し支配する支配神でもあるとする信仰と、牛頭天王の本地は薬師如来や観音菩薩であり、その垂迹としての牛頭天王神であるという信仰がある。盲僧は、これらの信仰にもとづいて治療を行っていたと考えられる。

五人の王子の所領分けは、五郎王子誕生前に大地の分配が行われた。そこで五郎王子は四人の王子と戦った末、四季土用と大地の中央を領ずるようになる。といった内容である。「佛説地神大陀羅尼王子經下卷」<sup>(15)</sup>に、「大荒神を念ずる輩は必ず加護を被むりて、障礙有る事無かるべし」としてそれぞれ五人の王子（荒神）の五行（四季・土用）の方

位を示している。五郎の王子については、【土用の七十二日を荒神に奉る、黄色の形を以て中央】に位置し、黄鉢龍王となつて、【黄鉢龍王は中央の、大日如来、土鉢、黄色、中紫角、是也、(中略) 國を守り、村、家内を守護し給ふに依つて、三宝荒神とは仏法僧の三心、上中下の三徳、天地草木を学び、三体に形を現じ、竈の神土公土王と現れ給ふ】と説き、この五郎の王子は三宝荒神に強く影響しているのが、『簠簋内傳』<sup>(16)</sup> 卷第二の「三箇惡日」(大禍日・狼籍日・滅門日)であると考えられる。

『簠簋内傳』は鎌倉時代末から南北朝の成立と推定され、牛頭天王の縁起は、室町時代に普及し、『簠簋内傳』の鈔本や版本、解説書は江戸時代にかけて多い。また『神道集』「祇園大明神事」<sup>(18)</sup>「赤山大明神」<sup>(19)</sup>にも牛頭天王の縁起を記し、修験道の大和金峰山には牛頭天王や八王子が祀られていたなど、その広がりは大きかったと推測できる。『簠簋内傳』卷第二には、

「右今三箇日取、貧窮飢渴障碍三神、貪欲瞋恚愚癡三毒、故萬事不<sub>レ</sub>用。所以者何、八萬四千煩惱以三毒爲<sub>二</sub>根本<sub>一</sub>、百億恒沙荒神以三神爲<sub>二</sub>上首<sub>一</sub>。故佛法專<sub>レ</sub>凶<sub>レ</sub>之。」<sup>(21)</sup>とある。

この荒神は、一切衆生の福德を奪い、一切の障碍をなし、貧窮・飢渴をあらわす存在なので、これを祀り鎮めることによって、荒神の三毒を転じて三宝(仏・宝・僧)となるという。

この三宝荒神がそれぞれの家の竈に住み、これを祀り鎮めなければ、家の人々に祟り、病氣などを起こし、荒神は祟りやすい性格を持つ竈神および屋敷神とされている。

牛頭天王と中国神話の盤古大王が結びつき語られるのが『簠簋内傳』である。『簠簋内傳』卷第二には、盤牛神話が記され、

「熟目、<sup>(22)</sup> 天元無<sub>二</sub>容貌<sub>一</sub>、地亦非有<sub>二</sub>形像<sub>一</sub>、猶如<sub>二</sub>鷄卵<sub>一</sub>。團欒<sup>(23)</sup> 無<sub>レ</sub>實、是日<sub>二</sub>最初伽藍卵<sub>一</sub>耶。于辰天開蒼々、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>厥大<sub>一</sub>幾<sup>(24)</sup> 計<sup>(25)</sup>。地闢廣廣、不<sub>レ</sub>察<sub>二</sub>其博<sub>一</sub>幾程<sup>(26)</sup>。盤牛王生<sub>二</sub>平其中<sub>一</sub>、」

とあり、天地の始め伽藍卵のような中から生まれた盤牛は、盤古大王と牛頭天王の結びつきを現していると考えられる。

『簠簋内傳』から病の原因である惡靈について考えてみたい。『簠簋内傳』卷第一<sup>(23)</sup>には、【吉祥天の大王商貴帝は天刑星は牛頭天王部類眷属が災厄をもたらす惡靈と化し衆生に憑依して、厄を鎮めたければ、自分をこのように祭れと指示する。】

牛頭天王が惡靈と化し衆生に厄をもたらすのは「巨旦の五節の調伏威儀」<sup>(24)</sup>が原因であるという、調伏儀礼によって發覺する。

『簠簋内傳』卷第一最後は、【惡<sup>(25)</sup>、可<sub>レ</sub>惡<sub>二</sub>巨旦<sub>一</sub>邪氣殘族魑魅魍魎類、信<sup>(26)</sup>、可<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>牛頭天王八王子等<sub>一</sub>。其八王子者、太歳、大將軍、大陰、歳刑、歳破、歳殺、黄幡、豹尾等也。】で終わり、牛頭天王の信仰を強調する。

牛頭天王の子の八王子は、春夏秋冬、四季土用、行疫神であり五星から生じた。

衆生に災厄をもたらす「巨旦尊者」の調伏儀礼の鎮めに関わることで、「勝負ノ段」にあるが、どういう違いがあるかみてみると、

「秘鍵、退散、ブクン、星ノ祭ニモ、スグレタル、御經ニテ、マシマセバ、去レバ、彼屋シメ、参人ノ、内ニワ、釋迦尾ノ、見弟<sup>(27)</sup>



子ガ、參<sup>まいり</sup>ゾンデ、三尺五寸ノ、與京ノ、琵琶ヲ、横タヘ、左ノ手ニワ、タヘナル、キンコウノ、野里ノ、コヘヲ、引シラベ、右ノ手は、サンゾク<sup>(25)</sup>ノ、バツヲ、持、口ニハ、天德<sup>てんとく</sup>、般若ヲ、讀奉ツルハ、心命、三防<sup>(26)</sup>、荒神、堅牢、地神モ花ト、ヘミヲ、フグンテ、ヨロコビ、マシマス、

巨旦尊者の調伏を鎮めるには、「琵琶を弾き」それに守護されて「転読の般若（心）経を読み奉」れば、その身体に不動明王が降りてきて、心命、三宝荒神、堅牢地神も元の場所に戻って喜んでいる。

琵琶を弾き経を読誦することによって、三宝荒神、堅牢地神とその眷属が喜んで本地へ返り、衆生の災厄は鎮まるという考え方である。よって病氣の原因は、三宝荒神、堅牢地神とその眷属の祟りである。

## 5、病氣の予防

土公神の居場所は「勝負ノ段」に、

「所は、春ハ、釜、夏ハ、門、秋は、井戸、冬は、庭ニ、コソ、土荒神モ、フシテマシマス、是故ニ、春三月、東向ニ、釜ヲ塗、釜ヲ、カエント申、夏三月、南向ニ、門ヲ、アケ、門ヲ、カヘント申、秋三月、西向ニ、井戸ヲ、ホリ、井戸ヲ、サラヘント申、冬三月、北向ニ、庭ヲ、ツクリ、庭ヲカヘント申、」<sup>(27)</sup>

土公神の四季に在す所を犯してはいけないという。これに共通するのが『籠盤内傳』卷第三「土公變化之事」に、

「春三月者在<sup>ハ</sup>龍<sup>カマニ</sup>臥 龍臥 南北 東西

夏三月者在<sup>ハ</sup>門<sup>カマニ</sup>龍臥 北南 西東

秋三月者在<sup>ハ</sup>庭<sup>カマニ</sup>龍臥 東西 南北  
冬三月者在<sup>ハ</sup>庭<sup>カマニ</sup>龍臥 西東 南北

右今案者、土公四時變化<sup>ナリ</sup>也。爾土公、三千大千世界<sup>ノ</sup>主、堅牢大地神<sup>ナリ</sup>也。所謂土公之變作者、當季安座舍宅也。此故不<sup>レ</sup>犯<sup>二</sup>安座<sup>一</sup>地<sup>ニ</sup>、將又龍臥變化者、腹背<sup>ハラセナカヘ</sup>頭足<sup>アヘアシノ</sup>之四威儀也。柱立<sup>ハシラ</sup>尤一二三四之相承有<sup>レ</sup>之肝要<sup>ナリ</sup>也。<sup>(28)</sup>

土公Ⅱ堅牢地神の居ます所を示し、この安座地を犯土してはいけないという。

土公Ⅱ堅牢地神等の荒神の居場所を犯さず、まつることによって病氣の禍が予防できるという考え方である。

修験の世界では病氣予防に、地霊神の性格を与えられた荒神を小祠にまつりこめる方法がとられる。盲僧も荒神まつりによって、障碍のもととなる過去荒神や現在荒神をはらい福をもたらす未来荒神をまねいている。それが可能となるのは、盲目によって獲得した超自然力が、何らかの形で荒ぶる神、荒神と関係したものでなければならぬ。

盲人が雷を中心とする自然の猛威に対抗する地上の呪術行為の一つに「その制圧に当っては大声を発していた。かかる場合、直射してくる稲妻―それは天矢―にも、目に衝撃をうけて再び盲目になる心配のない盲人もまた、音響を発して雷鳴に対する呪術を行使した」という。つまりは自然の猛威（雷Ⅱ荒神）に対して盲人の身体的特性から統御する力を有していると考えられていた。<sup>(29)</sup>

したがって盲僧は、その身体的特性から荒神を崇拜対象として祀ることによって、荒神と同じ性格、同じ力を持つものとして再生し、再

生した盲僧は、現在障礙をもたらししている現在荒神や過去荒神を追い払い、新たに未来荒神を招くことができたのではないか、そして邪悪な荒神をまつりこめる事によって福の神とすることも出来たのではないかと考えられる。

よって病氣予防は、荒神（堅牢地神等）の方角を犯土せず、未来荒神を小祠にまつりこめることである。盲僧はその身体的特性から荒神と同化し、追い払う、まつりこめるなどの操作の出来る身体である。

病いを予兆するものに、星の動きがある。

「本經（地神經）」の冒頭には、

「七餘ノ星、八花ノ星、九餘ノ星ノ、災難、切ツキトウ、モ  
ウスルトウモ壹々ニ、固メツシイテ、壹歳ノシヨム、心ニマアカ  
セエテ、圓滿也。」<sup>(30)</sup>で始まる。

星の災難について、近世に広く通行していたと言われている『曆林問答集』<sup>(31)</sup>から考えてみたい。この書は、陰陽道が、宿陽道<sup>(32)</sup>を取り入れ、両者は混ざり合い、新たな陰陽道へと展開していったと言われるものである。

「星」については、【諸々の星は列なる万物の精（かみ）、體地において生ず、各属するものあり、野に在って物を象り、朝に在って官を象り、人に在って事を象る。又居ますは中央、之を北斗と謂う、天の樞也。】という。

さらには五星について述べ、【又五星あり、即ち五行の精（かみ）なり。上帝の使いを為し、天命を受けて、各下の大地を司る。故に配して五方、異において正す、或いは有福徳助、或いは禍罰威す刑、常

に軌に順って、錯乱を以て顕異す。】これは天の精（かみ）の使いとして大地においた星たちを意味する。そして錯乱がある時には異なる現れをし、錯乱を予兆するという。つまり天変地変を星によって予兆し、そこから起こるであろう流行病をも予言していたのではないかと考えられる。

修験道における陰陽五行説にのっとった宗教的世界観は、天の精（神）・地（御）霊神・星などの信仰とどのような関わりがあるのだろうか。

近世修験者が里に定着し共同体の宗教行事に参加するようになると、修験の新しい解説書が作られた。そのひとつが『修験道修要秘決』である。

「天地和合時生ニ萬物」。陰陽交合時生ニ人體。然縁起以來假立ニ生佛名字。愚智貴賤貧富苦樂治亂興亡全在ニ天命。故不生變化終歸ニ一氣。天地陰陽未分以前清濁相和。故名ニ混沌。」<sup>(33)</sup>

とあり、ここから、陰陽道の氣や陰陽五行といった宗教的世界観が見られる。しかし天命が人々のすべてを支配していることもわかる。天命により、地に降り神となった星については前述したが、こういったことから占星術によって病氣の予防を行ったと考えられる。

以上釈文を読み解いた結果、病氣の原因は、三宝荒神・堅牢地神とその眷属の祟りであった。予防は、三宝荒神・堅牢地神とその眷属の方角の地を犯土しないことであった。

盲僧独自の病氣治療は、琵琶による地神経誦誦によって、荒神を本地に喜んで返し祟りをなくすことであった。

## 二、病氣治療と琵琶

中世末の筑後高良山には、盲僧が集まっていたらしく、遷宮や祭礼の御神幸に琵琶をもち地神経を読み、社役として勤めていた。また蟬丸の伝説<sup>34</sup>が記されている。

蟬丸を守護神とした盲僧は、堺の地の鎮めを行っていたと考えられ、彼等は、境・坂など辺境の地で楽器を用いて前述した身体的特性から、雷の制圧や祈雨、止雨に関わる呪術を行っていたのではないか、そして祀っていた神は、水神・地神・天神（龍蛇神）でないかと考えられる。彼等の守護神は、琵琶を弾くことによつて怨霊鎮撫に強力な力をもつ神であつただろう。この神が琵琶法師を守護し、水神・地神・天神（龍蛇神）＝荒神の崇りを鎮め、病氣を治療していたと考えられる。

盲僧は荒神祓いの時に、琵琶を弾きながら読誦していた。盲僧と琵琶のつながりを「地神盲僧縁起」<sup>(35)</sup>には「インドの阿育王の子鳩奈羅王子が、父大王を救うために両眼を捧げ贈り、これにより盲と成り王位を捨て、諸国を遊行し琵琶を弾いていた。その妙なる故に妙音菩薩が降臨して琵琶の秘曲を示された。これにより沙門に入り盲僧となる。金光明最勝經堅牢地神品を琵琶を弾き読誦し天下泰平に勉めてまごころをつくして祈つた。」と説いている。

わが国では、楽琵琶と盲僧琵琶の二系統がある。前者は、雅楽の管弦合奏用の楽器として使用される四弦曲頭の琵琶である。後者は盲僧が宗教儀礼に使用するもので、インドから伝来したと考えられている。盲僧琵琶は、持ち運びに便利なように小型で軽く笹の葉の形に似てい

ることから笹琵琶とも呼ばれた。構造上の特長を楽琵琶と比較すると、多くは鹿首部分が長く柱の高さが高く堅い。柱の数が五〜六個と多い。表板の左右には日月を象る。撥面は生地で、覆手の下には支柱がある。陰月は小円形をしていて、四絃の糸巻きの順序が異なる。などの相異点が上げられる。<sup>(36)</sup>

### 1、盲僧の守護神

琵琶の秘曲を妙音菩薩から授かったことを「地神盲僧縁起」は説いている。

『法華経』「妙音菩薩品第二十四」<sup>(37)</sup>には、妙音菩薩は「十万種の伎楽を以て雲雷音王佛を供養」し、「その身は種々の現われをし、衆生の為にこの教典を説き」、この菩薩の種々の現われ方は、梵王身、帝釈身から地獄の餓鬼、畜生までのすべての身を現わして娑婆世界を救護するとする。ここでは伎楽の菩薩としてすべての衆生を救うために現われた。

鎌倉時代に成立した天台僧光宗の編述した仏教書『溪嵐拾葉集』には妙音菩薩は、「求聞持三字事」<sup>(38)</sup>に「弁才天は又の名を妙音天、若しくはこれ妙音菩薩是也」として弁才天と同体となり、芸能の守護神となつていった。

盲僧の「妙音講縁起」<sup>(39)</sup>にも、「小宮太子は賀茂大明神の再来也」末世の盲人を助けるために両眼を潰して誕生し、その後座頭となつて「小宮太子虚空を仰て妙音弁才天を念じたまひ、末世ごうくに至迄、座頭の守護神となり」と説く。座頭が弁才天を信仰し、それに関する宗



吉祥天、首は大小文殊の化身である。四つの弦は四仏如来一つずつ違つていらつしゃいます。

第一の弦は、釈迦如来、その弦を弾き響かし差上げる所三千大千世界をかけて寿命朝恩長くあるのは当然と響かせなさる。第二の弦は、阿弥陀の垂迹です。その弦を弾き響かし差上げる所には、威光新たに輝き世の中の難を鎮めなさる。第三の弦は、十二大願薬師瑠璃光如来の誓願です。その弦を弾き響かし差上げる所には、善子の同役や良い役の業と響かせなさる。第四の弦は、八人の鬼の額の白い長い髪を一本ずつ抜き、寄せ掛けて上の方を鬼福神と読まれ、下の方は鬼王と読まれている。鬼王と読まれ堅めに四王と名づけて差上げる。その弦を弾き響かし差上げる所には、使いの僧が駆けつけ忠勇や万事の言動に妖言ある者は、七里より内には来れないようになさるのは大四王の因縁です。】

琵琶や琴などの弦楽器は、巫術の儀式的伴奏に用いられ、降神の楽器としてさらには呪術や寿祝の儀礼、そこから発生した「語り」や「うた」などの伴奏に用いられた巫具である。

「対馬盲僧のサワリ落とし」<sup>(51)</sup>の逸話には、「カッパ」「赤子の霊」「死霊」などのサワリの声が出ている。この世のものではない見えざるサワリには声や身振りで表現していたという。これは声が「それを発している主体」人称の息にのせて、その主体を他のベルソナとかかわらせる<sup>(52)</sup>あるいは「他の名を呼ぶことで、名づけられた他の主体」人称を、声の中にひき出して、呼ぶ者をはじめとする他のベルソナとかかわらせる<sup>(53)</sup>といったものを有していると考えられる。

口に出して言うことは、本来呪的な行為であり、「イフ」の「イ」がイム「忌む」イハフ「斎ふ」に通じるという。さらにイフことはが、「言語以前の神の「声」の領域から「ことば」が分節されてくる、その瞬間に立ち会った記憶を秘めていたのではないか」<sup>(54)</sup>という。イフということが、「声」にかかわる呪的な行為であると考えられる。

また琵琶と声についても音楽と言語と別々の分野が「密接にかかわりすぎているというより、ある部分では一つの音の実体をなしている」<sup>(55)</sup>と考えられる。

「地神経琵琶之借」の場合も同様に考えられるのではないだろうか。盲僧の声は、「釈文」の登場人物のベルソナ（ヨーロッパでは日常語で身体と人格をもったものとしての個人を指し示す）<sup>(56)</sup>ものであると考えられる。

#### 4、琵琶の宇宙観

前述の「地神経琵琶之借」にでてきた琵琶を、大日如来の身体として考えた場合、頭部は須弥山、両眼は日月、頸部は大小文殊菩薩、腹部はオゴ、如来、足部は毘盧遮那仏、両手は須弥山・摩耶夫人に譬えられていると考えられる。盲僧は、「地神経琵琶之借」<sup>(57)</sup>（釋文）の登場人物と関わりをもつ身体を表現し、琵琶は大日如来の身体と宇宙観を表現している。

さらに独自のものとして、琵琶は大日如来の宇宙観を示している。その宇宙観を、前述した『修驗道修要秘決』から見てみたい。

「夫論ニ世界ニ混沌未分ニ元始其形如鶏卵ニ。鶏卵者指ニ法法不生空理ニ。眞色無レ形眞空無レ名。於レ茲ニ建ニ立天地兩盤ニ。自レ本混元之一氣者法界孔字命風也。命風者天地和合精靈也。天地與ニ精靈ニ元來不二也。(中略) 混沌者界孔字本不生眞理也。」<sup>(57)</sup>

といったものである。ここでは、天地未分の根元に大日如来をおき、大日如来によって天地が分かれ、天地和合の時萬物が生じ、大日如来がこの世界を創造したという宇宙觀が見られ、人間の身体も、大日如来が創造した身体という密教的な身体觀を琵琶に再解釈するのである。

盲僧の病氣治療の固有性は、「釋文」を誦誦し手には大日如来の身体である琵琶を奏でる。この時盲僧は大日如来の宇宙創造をくり返し、病人は象徴的に世界創造の巨大な生命力の次元に立たされ、原初の生命の充実にひたされると同時に、かの時に創造を可能にした巨大な力に浸透され病氣を治おすと考えられる。

「琵琶の釋」に見られる大日如来の宇宙創造神話は、大日如来が世界の新創造を目的に、病人救済のために降下するよう誓願しているといった内容であるが、この荒神祓い(病氣治療)における誦誦は、病人が生の新たな一步を踏み出すきっかけを作るのを助け、大日如来の世界創造への復帰は再生への希望をもたらす。という治療効果があるう。

したがって荒神祓いにおける琵琶の誦誦は、荒神を元の場所に喜んで返し崇りをなくす病氣治療である。具体的な誦誦には、病氣治療に必要な荒神を本地に喜んで返し崇りをなくす効果がある。琵琶自体は

『孔雀王呪經』『佛母大孔雀明王經』などから疾病や災害のときに効果があり、『法華經』には琵琶を奏でることによって諸病や七難を除き、琵琶を奏でる人も奏でさせた人も苦を離れてさとり道完成する、即身成仏できるなどの効果がある。さらに大日如来の宇宙創造時の巨大な力による、再生への希望をもたらす病氣治療である。

### おわりに

呪術的医療を行った盲僧の固有性を明らかにするために「釋文」を読み解いた結果、盲僧独自の病氣治療は、琵琶による地神経誦誦によって荒神を喜んで本地に返し、崇りをなくすことであった。

彼等が行った医療は、民間の牛頭天王信仰が共同体の共通の知識となつて行われた民間医療である。広がりをもっているこの医療は、一貫した一つの病氣の原因によって形成され、その原因は三宝荒神、堅牢地神とその眷属の崇りであった。それに基づく予防は、荒神、堅牢地神の方角を犯土せず、未来荒神を小祠にまつりこめることであった。

具体的に荒神祓いの儀礼における琵琶の誦誦は、荒神を喜んで本地に返し崇りをなくす効果があった。琵琶自体には奏でた人も奏でさせた人も相互に諸病・七難を除き、苦を離れて即身成仏できる効果があり、さらには大日如来の宇宙創造時の巨大な力を持ち、病人に再生への希望をもたらす病氣治療であった。

以上の結果から医療史研究において、信仰(牛頭天王信仰)と技術(琵琶の誦誦)の融合がみえてきた。

〔注〕

- (1) 塚本優子氏（先代住職、神代精蓮氏の娘）からの聞き取りによる。
- (2) 鶴田銳彦「感応院文書」（『福岡県古文書等緊急調査報告書（柳川市・山門部）』福岡県文化会館図書部、一九八〇年）二頁～三頁。二四頁～二七頁。柳川古文書館に保管する。
- (3) 五来重編『日本庶民生活史料集成第十七卷、民間藝能』（三一書房、一九七二年）二〇六頁～二二〇頁。釋文の引用については同書どおりにした。さらに読みやすくするために適宜説点を付し、当て字や平かな表記の箇所には原文脇（一）内に正字と判断したものを補った。【一】に概要を揚げておいた。なお以下の記述では「釋文」と略記する。「釋文」についての先行研究は、民俗学の立場から、「釈文」は古い形の説教祭文であると述べた五来重氏の同書「解説」、「釈文」と「土公祭文」・「山伏神楽」とを比較考察された成田守氏の『盲僧の伝承』（三弥井書店、一九八五年）、「釈文」の伝承文芸としての宗教性について述べた荒木博之氏の「盲僧の伝承文芸」（『講座・日本の民俗宗教』民間宗教文芸）弘文堂、一九七九年）、西岡陽子氏の「地神盲僧の伝承詞章——地神経」および釈文について——」（『講座 日本の伝承文学 第八巻在地伝承の世界』【西日本】、三弥井書店、二〇〇〇年）、荒木氏、西岡氏共著の『地神盲僧資料集』（『伝承文学資料集成 第十九輯』、三弥井書店、一九九七年）、薩摩常楽院の釈文について述べた『盲僧と民間信仰』（『村田熙選集1』、第一書房、一九九四年）、などが挙げられる。その他『地神経』から日本と朝鮮、中国との関連について述べた増尾伸一郎氏の「地神盲僧と朝鮮の経巫——『地神経』の流伝と盲僧の起源伝承をめぐって」（『呪術の知とテクネー——世界と主体の変容（叢書・文化の越境10）』、森話社、二〇〇三年）等が挙げられる。
- (4) 佐々木哲哉『福岡の民俗文化』（九州大学出版会、一九九三年）二八五

頁～二八六頁。

- (5) 前掲書（3）一一九頁～一二二頁。
- (6) 「釋文」二〇六頁。
- (7) 岩田勝『神楽源流考』（名著出版、一九八三年）一三八頁。
- (8) 同右 一三七頁。
- (9) 「釋文」二三〇頁。
- (10) 東寺貴重資料刊行会「古代説話集 注好選 原本影印拜釈文」（東京美術、一九八三年）一三七頁。
- (11) 「釋文」二三三頁～二二五頁。
- (12) 同右 二一六頁。
- (13) 同右 二二〇頁。
- (14) 同右 二二一頁。
- (15) 前掲書（3）一二六頁。
- (16) 神道大系編纂会『神道大系論説編十六陰陽道』（神道大系編纂会、一九八七年）四五頁。なお以下の記述では『篋簋内傳』と略記する。
- (17) 牛頭天王縁起の研究は、西田長男「『祇園牛頭天王縁起』の成立」（『民衆宗教史叢書第五巻 御霊信仰』、雄山閣出版、一九八四年）、松本隆信『中世における本地物の研究』（汲古書院、一九九六年）村上學「神道集の世界——祇園大明神事を通じて——」（『説話の講座第五巻 説話集の世界Ⅱ——中世——』、勉誠社、一九九三年）、今堀太逸『本地垂迹信仰と念仏——日本庶民仏教史の研究——』（法蔵館、一九九九年）、等が挙げられる。『篋簋内傳』と牛頭天王縁起の関わりについての研究は、村山修一『日本陰陽道史総説』（塙書房、一九八一年）等が挙げられる。牛頭天王信仰の民間への広がりについての研究は、山本ひろ子「行疫神・牛頭天王——祭文と送却儀礼をめぐって」（『異神——中世日本の秘教的世界』、平凡社、一九九八年）、小松和彦「いざなぎ流祭文研究覚帖・天刑星の祭文」

- (17) 『春秋』、春秋社、一九八九年八、九、十、十一月号)、斎藤英喜『病人祈禱と「天刑星の祭文」』(『いざなぎ流祭文と儀礼』、法藏館、二〇〇二年)等が挙げられる。
- (18) 神道大系編纂会『神道大系文学編一神道集』(神道大系編纂会、一九八八年)六六頁〜七二頁。
- (19) 同 右 七一頁〜七二頁。
- (20) 佐藤虎雄『金峰山における祇園信仰』(『神道史研究』、神道史學會、一九六二年十一月)一九四頁〜一九六頁。
- (21) 『簞簋内傳』四五頁。
- (22) 同 右 四〇頁。
- (23) 同 右 三二頁〜三四頁。
- (24) 同 右 三四頁。
- (25) 同 右 三五頁。
- (26) 『釋文』二二二頁。
- (27) 同 右 二二二頁。
- (28) 『簞簋内傳』五九頁。
- (29) 近藤喜博『平家琵琶以前』(『文学』、岩波書店、一九六二年十月)七八頁。
- (30) 『釋文』二〇六頁。
- (31) 中村璋八『日本陰陽道書の研究(増補版)』(汲古書院、二〇〇〇年)三六一頁。
- (32) 宿曜道の研究は、桃裕行「宿曜道と宿曜勘文」「宿曜勘文集」(『桃裕行著作集第8巻』、思文閣出版、一九九〇年)、山下克明「宿曜道の形成と展開」(『後期撰関時代史の研究』、吉川弘文館、一九九〇年)等が挙げられる。星祭りの研究は、金指正三『星占い・星祭り』(青蛙房、一九七四年)等が挙げられる。
- (33) 日本大蔵經編纂会『修驗道修要秘決』(『修驗道章疏第二卷』、国書刊行会、二〇〇〇年)三八二頁。
- (34) 荒木尚「モ、タウト名付ル夏」(『高良玉垂宮神秘書・同紙背』、高良大社、一九七二年)一三〇頁〜一三一頁。
- (35) 前掲書 注(3) 二二五頁。
- (36) 盲僧琵琶の先行研究は、村山道宣「琵琶・忘れられた音の世界」(『あるくみるさく』、近畿日本ツーリスト、一九七八年五月号)、永井彰子「音の道―琵琶の場合」(『國文學解釈と教材の研究』、學燈社、一九九二年十二月号)、吉川英史「図説日本の楽器」(東京書籍、一九九二年)、薦田治子「雅楽琵琶から盲僧琵琶へ―楽器の系譜」(『巫覡盲僧学会会報第十五号』、巫覡盲僧学会、二〇〇三年)等が挙げられる。
- (37) 『大正新脩大蔵經』第九卷、法華部全華嚴部上(大蔵出版、一九八九年)五六頁a段。
- (38) 同 右 『第七六卷、統諸宗部七』、六二四頁a段。
- (39) 西日本文化協會『福岡県史 文化資料編盲僧・座頭』(福岡県、一九九三年)三八五頁〜三八六頁。
- (40) 柳川市史編纂委員会・別編部会『新柳川明証図会』(柳川市、二〇〇二年)三三三頁〜三三四頁。
- (41) 『釋文』二〇七頁。
- (42) 日本大蔵經編纂会「孔雀經轉讀作法祈雨」(『修驗道章疏解題』、国書刊行会、二〇〇〇年)一四九頁。
- (43) 『大正新脩大蔵經』第十九卷、密教部二(大蔵出版、一九八九年)四四六頁c段〜四四七頁a段。
- (44) 『大正新脩大蔵經』第十九卷、密教部二(大蔵出版、一九八九年)四一八頁a段。
- (45) 『釋文』二〇七頁。



- (46) 「釋文」二〇七頁。
- (47) 前掲書 注(3) 一二三頁。
- (48) 前掲書 注(3) 二二六頁。
- (49) 『大正新脩大藏經、第九卷、法華部全華嚴部上』(大藏出版、一九八九年九頁a段。
- (50) 「釋文」二〇七頁。
- (51) 村山道宣『「対馬盲僧のサワリ落とし」―行者の声、サワリの声―』(『民族宗教第五集』東京堂出版、一九九五年) 一〇九頁～一一一頁。
- (52) 川田順三『聲』(筑摩書房、一九八八年) 二五二頁。
- (53) 同 右 一二二頁。
- (54) 斎藤英喜「声とことば」(『古代文学講座7ことばの神話学』勉誠社、一九九四年) 九一頁～九二頁。
- (55) 川田順三「口頭伝承論(一)―音のコミュニケーションの諸相」(『社会史研究2』日本エディタースクール出版部、一九八三年) 一〇頁。
- (56) 前掲書 注(52) 二〇四頁。
- (57) 前掲書 注(33)

(もりた さちこ) 文学研究科仏教文化専攻修士課程)

(指導…斎藤 英喜 助教授)

二〇〇三年十月十五日受理

